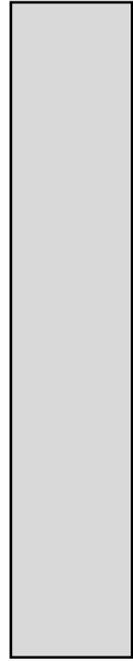


いきなり異世界召喚

く巫女として呼ばれた私は強引なカレに溺愛求婚されるく

ショートストーリー 二人きりの月夜



私はずっと目をそらして気づかないふりをしていたのかもしれない。

巫女様……いや、この世界に来たばかりの彼女が何を考え、何を思っているのかということ。



二人が共に生活を始めて、数日たったある日の夜中、ふとコハクは目を覚ます。

そっと視線だけ動かして窓の外を見ると、月はまだ空高く登っている。どうやら、本来起きる時間よりずいぶん早く目覚めてしまったようだ。

もう一眠りしようと目を閉じてみるも、どこかにいつてしまった睡魔は戻ってきてはくれず、むしろ先程よりも目が冴えてしまった。

「はあ……」

さてどうしたものか、コハクはため息をつく。

いつもならば眠気がくるまで庭を散歩したり、本を読んだりして過ごしたりするのだが、今は腕に鎖が付いているため、動くことができない。

天井を数秒見つめ、ゆっくりと息を吐き出したコハクは眠ることを諦め、音を立てないようにそっと体を巫女のほうに向けた。

ガチャリと鎖が小さく音を立てる。

起こしてしまったかもしれない……薄く目を開け様子をうかがうと、巫女の美しい髪に窓から差し

込む月明かりがキラキラと反射していた。

(なんて美しいのだろうか)

数秒ほど見惚れてしまう。そのまま後ろから抱きしめようとする、隣の小さな背中が震えていることに気がつき手を止める。

季節的に夜はまだ少し冷える、もしかして寒かったのかもしれない、そう思ったコハク慌てて声をかけようとする。

「っ……」

しかし、その言葉は、コハクの口から出ることはなかった。なぜならば、震える背中越しにわずかに鼻をすする音が聞こえたのだ。

(泣いていらっしやるのか……?)

ほんの少しのとまどいのあと、コハクの全身は

まるで金縛りにあったように動かなくなる。

なぜ? という思いが頭の中を駆け回り思考が

うまくまとまらない。

すると、

「……どうかしたの?」

声を掛けようか悩んでいる間に、逆に声をかけられてしまった。

(もうこちらが起きていることは巫女様には丸わかりでしょう)

少し間をおいたあと意を決して、

「いえ、なんだか目が覚めてしまって……巫女様

こそどうかされたのですか?」

あくまで泣いていることに気づいていない、とい

つもどおりを装って、声をかける。

「なんでもないよ」

そう答える声は精一杯ごまかそうとするように震えていた。

「そうですか」

何も知らないフリをして、返す。胸にチクリと罪悪感が芽生えた。

そういえば今まで、この世界に来てから巫女は弱音を吐いたことはなかった。初めてあったときに帰りた、夫婦になりたくないといったきり、一度も。

その様子を見て、コハクは巫女のことを強い少女だと思っていた。

さすが巫女として選ばれる素質を持っているのだと、勝手に納得していたのだ。

大丈夫なわけがない、異世界にいきなり連れてこ

られ、見知らぬ男と夫婦になれといわれたのに。

正直、こちらに呼ぶのは若く健康な女であれば誰でも良かった。召喚儀式が成功し、たまたま呼ばれたのが彼女であっただけなのだ。

コハクは巫女と初めてあったときのことをよく覚えている。巫女の腕を強く掴み、壁に押し付けたかの感触を。

今考えても、行ったことは自分の種族を守るためには仕方ないことだと、後悔はしていない。

ただ、自らの行なったことを、正当化するために巫女の気持ちから目を逸していたかもしれない。

笑顔で何もなかったかのように接してくれている表面上の彼女ばかりを眺めて、満足していたのだ。

何を考えているか知ろうともせず……。



「ねえ」

巫女から再び声をかけられてしまった。どうやら少しの間意識をどこかに飛ばしてしまっていたらしい。

顔を下げると、いつのまにか巫女がこちらを向いており、少し赤くなっている二つの瞳がコハクのことを見つめていた。

「ああ、すみません、考え事をしていて」

「考え事って?」

「それは内緒ですよ」

「いつも内緒じゃないっ……」

人間の世界では狐は人を化かす生き物らしい。

本当はそんなことはないというのに。

ふふっと軽く笑いながら、ゆっくりと腕を上げ、怖がらせないようにそっと抱きしめる。

一瞬ビクッと体をこわばらせるも、それ以上の抵抗はなく、おとなしく腕の中におさまっている巫女がとても愛おしくおもう。

「……このような夜を何度も?」

「……」

巫女は何も言ってくれない。

静かな夜の静寂の中、お互いの心臓の音のみが響

き合っていた。

そのまま、優しく巫女の背中を撫でていると、

段々と巫女から再び鼻をすするような音が聞こえてきた。

「寂しい、帰りたいよ……」

という声と共に。

(……巫女様は強いわけではなかったのですね)

コハクは自らの今までの浅はかな考えを、反省した。都合も考えも、巫女の気持ちさえも、こちらのいいように勝手に押し付けていたことを。

(なんて私は勝手だったのでしょうか……)

巫女が消えてしまわないようにさらに腕に力を入れて強く抱きしめる。

狐族の長として彼女には何不自由なく暮らしてもらいたい。それは彼女を呼ぶ前からそう決めていた。しかし、それ以上にこの数日過ごしている間に一人の男としても彼女には笑っていてほしいと願うようになった。

泣いている巫女になにか声をかけなければと思

うものの、いつもはうまく回る口がなぜだか今日は動かない。

口を開いては閉じを繰り返していると、先に口を開いたのは巫女だった。

「もうすこしこのままでいて」

想定していなかった言葉にコハクは一瞬驚く。

しかし、すぐに「はい」と前髪をかき分け額にちゅっと口付けを落とす。

「ねえ、それはいいって言ってない」

「ふふっ、申し訳ありません。月明かりに照らされた巫女様があまりに美しくて……」

微笑みながら、頬を膨らませる巫女にそう告げると耳を赤くしそのまま黙ってしまった。

「これからもこのように、抱きしめて眠ってもいい

ですか？」

その様子を眺め、少しだけいつも通りの調子を取りもどしたコハクが問いかける。

「……最初は一緒のベッドで寝るのも嫌だ、って言ったのに、拒否権なんてないんですよ」

「ええ……ですが、もう巫女様に寂しい思いはさせません、だって私達は夫婦なのですから……」

「ねえ、まだ認めてないんだけど……」

何度も伝えてもまだに認めてくれない。

だが、コハクは少し二人の心の距離は近づいているような気がしていた。

「おや、もう少ししたら夜が明けますよ。」

そうしたら、まだ朝露で濡れている花々を眺めながら散歩をいたしませんか？ それまではもう少し

このままで……」



いままで私は長い時間一人でした。

ずっとずっと……。いえ、もしかして長として、しっかりとあるべきだと思うあまり、周りが見えていなかったのかもしれない。

今日はとても大事なことに気がつくことができました。

これまで一人では退屈だと思っていた眠れない夜。巫女様がいるならば存外、よいものなのかもしれないね。



「もう、貴女以外考えられません……これから、

ずっとそばにいてください、巫女様」

ちゅっと再び額に口づけをしたコハクは強く強

く巫女を抱きしめた。

おわり